

浜松城跡 27 次発掘調査 — 現地説明会資料 —

浜松市文化財課

2019.10.19



遠州浜松城絵図（17世紀）

この絵図は、江戸時代の初めに描かれたものです。城内の主要な建物は描かれていませんが、石垣や門、櫓、塀などは詳細に描かれています。

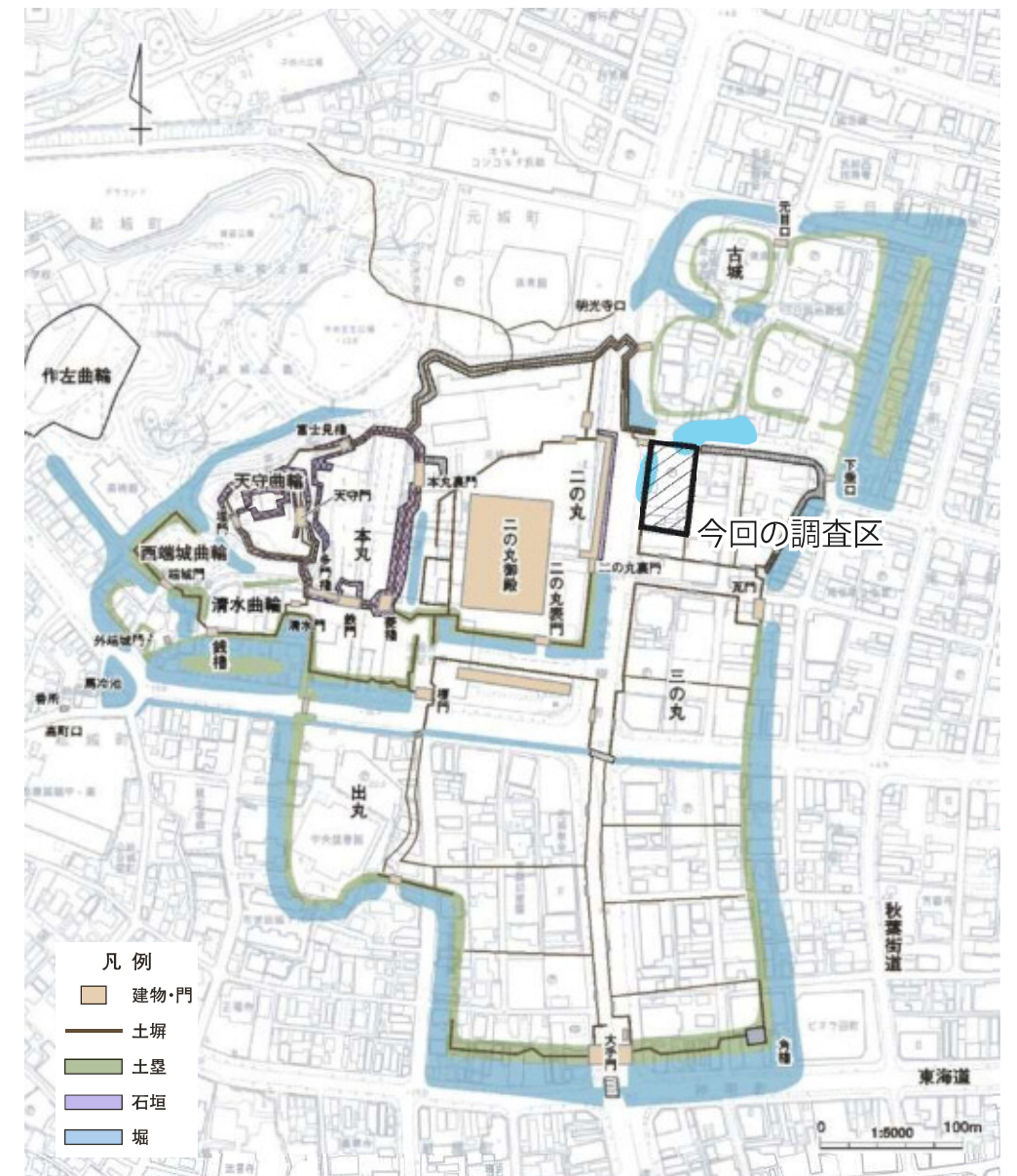
今回の発掘調査で確認された2つの堀跡は、出土した土器の年代から、元亀元年（1570）に徳川家康が浜松城を築く前にあった引間城の堀にあたる可能性があります。北側の堀跡は、出土した遺物より江戸時代を通じて堀として維持されたと考えられ、絵図に描かれた引間城の南西の曲輪に伴う堀の可能性があります。一方、西側の堀跡は、描かれていないことから、江戸時代の早い段階で埋め立てられた可能性が、絵図からうかがい知ることができます。

※ 注意事項

・新聞やテレビ、ホームページ、市刊物等で現地説明会の様子が紹介される可能性がありますので、あらかじめご了承ください。
・SNS やインターネットに写真・動画を掲載する場合は、個人が特定されるような写真や動画の掲載を控えていただくようお願いいたします。 浜松市文化財課 053-457-2466

浜松城は、三方原台地の東縁部にある段丘を利用した平山城です。浜松城は、15 世紀に築かれた引間城を前身とします。築城時の城主は不明ですが、16 世紀前半には、今川氏配下の飯尾氏が城主を務め、整備を進めたとみられます。引間城の構造は、東西 120m・南北 150m ほどの敷地を堀や土塁などによって、4 分割した形状をしています。現在、その一角には元城町東照宮が建立され、境内の北東隅には土塁が残存しています。引間城はその後、1570 年に岡崎から浜松へと拠点を移した徳川家康によって整備が進められ、浜松城と改称し、西側の丘陵部へ拡張・整備を行いました。1590 年、徳川家康の関東移封に伴い豊臣家家臣の堀尾吉晴が浜松城に入り、高石垣や瓦葺き建物を整備しました。現在の浜松城公園でみられる浜松城の石垣の多くは、堀尾氏により構築されたものとみられます。1600 年、関ヶ原の戦いに徳川家康が勝利し、浜松城は徳川譜代の大名が治める拠点になりました。堀尾氏以後の大名は、城内と城下町の再設計に乗り出します。三の丸は拡張され、浜松城の中枢として、二の丸には、藩主が居住や政務を行う御殿が建てられたと考えられます。また、浜松城の城主となった多くの大名が、後に幕府の要職に就いたことから、「出世城」としても知られるようになりました。

今回の発掘調査は、民間開発に先立つ調査として行っています。調査対象地は、浜松城の三の丸にあると考えられます。三の丸の周囲には、土塁や堀が巡り、土塁の端部等には櫓が建てられました。なお、三の丸は、江戸時代には、家臣の居住区として利用されたと考えられます。このことは、江戸時代の絵図にも侍屋敷と描かれており、屋敷敷地として利用されていたことがうかがえます。



浜松城跡 27次調査の成果

今回の発掘調査地は、浜松城の三の丸にあたります。三の丸の本格的な発掘調査は今回が初めてです。調査の結果、北側と西側の2箇所掘跡を確認し、戦国時代から江戸時代の遺物が出土しました。



北側の堀跡

北側の堀跡を確認

検出した堀の規模は東西15m、南北8m、深さは2.4m以上あり、調査区外へと延びています。この堀は、出土した土器の年代から戦国時代に形成され、江戸時代を通じて堀としての機能が維持されていたと考えられます。



西側の堀跡

西側の堀跡を確認

検出した堀の規模は南北21.5m、東西最大3.5m、深さは2.0m以上あり、調査区外へと延びています。この堀は、出土した土器の年代から北側の堀と同じ、戦国時代に形成されたと考えられます。しかし、均質な土砂で短期間に埋め戻されていることや江戸時代の絵図に描かれていないことから、遅くとも江戸時代の早い段階で埋め戻されたと考えられます。



柱穴跡(礎石か)



柱穴跡(根固めか)

小穴等の多くの遺構を確認

調査区内の全域において300基以上の小穴を確認しました。確認した小穴の一部からは、基礎や根固めに使用されたと考えられる石材を含むものもあり、建物の柱穴等と想定されます。遺構に伴う遺物は限られていますが、遺構の真上の土の中からは室町時代から江戸時代の遺物が出土しました。このことから、引間城が築城されたころから建物が広がり、浜松城の整備に伴い城内に取り込まれたと考えられます。



主な出土遺物



遺物出土状況(内耳鍋 戦国時代)

出土遺物

今回の調査では、戦国時代から江戸時代を中心とした時期の遺物が多く出土しました。出土した遺物は、かわらけと呼ばれる素焼きの小皿、すり鉢や鍋等が多く含まれます。